

クノッフ作品における夢と現実

—《ヴェラーレンと共に一天使》及び《愛撫》の画中文字の解読より—

矢追 愛弓 (九州大学)

フェルナン・クノッフ(1858~1921)は、世紀末ベルギーにおける象徴派を代表する画家として知られている。本発表では、1889年制作の《ヴェラーレンと共に一天使》(個人蔵)―以下《天使》―と、1896年制作の《愛撫》(ベルギー王立美術館蔵)をとりあげ、両作品の密接な親和性について検討する。とくに、両者に共通する画中文字の解読を試みとして提示し、クノッフが、一貫した主題を両作品に象徴させていることを明らかにする。

一人の男性と人頭獣身の女性とが対峙するという基本構想において、双方のアンドロギュヌス的關係性を含め、両作品が極めて類似していることは、近年の Cole 氏の論文 (*The Art Bulletin*, n° 3, Vol. XCI, September 2009) に至るまで、すでに多くの先学が述べているところである。しかし、両作品の画中文字については、画家の古代エジプトへの関心と関連づける指摘があるのみで、これまで判読が試みられたことはない。

クノッフの画中文字はブロック体のアルファベットで表記されることが一般的である。だが、《天使》と《愛撫》の場合は、縦列と横列の違いはあるものの、アルファベットの省略形が同一の文字列を成しており、最終的に「私の夢はこの現実を救うだろう」という、フランス語の一節となっている。

《天使》は、クノッフの理解者であった象徴派詩人エミール・ヴェラーレン (1855~1914) の詩集『壊滅』(1888) に収められた一編に取材したものと考えられ、詩が主題とする理性と自らの内に潜む獣性との相克を、甲冑姿の男性と人頭獣身(虎)の女性像へと展開している。一方《愛撫》は、直接的には画家自身がオノレ・ド・バルザック (1799~1850) の『砂漠の情熱』(1832) に依ったことを述べているが、物憂げな表情をみせる青年と蠱惑する人頭獣身(チーター)の女性像は、古代ギリシャのオイディプスとスフィンクスの神話を想起させる。

両作品においてクノッフが取材した文学作品は異なる。しかしいずれにせよ、女性の誘惑に対して理性と欲望との間で葛藤し、精神的苦悩にさいなまれるという設定には、すでに先行研究が指摘するように、当時流行したファム・ファタルの一典型が認められてよい。さらに両作品には、その文脈だけでは解釈できない広がりを与えられている。画中文字の解読に従えば、夢みることこそが現実の精神的苦悩を救うという画家自身のメッセージが両作品に織りこまれているのではないだろうか。現実を救う夢は、クノッフが「私の信ずる唯一の神」と述べるほど信奉していたヒュプノスの支配する眠りと分かちがたく結び付いていたに違いない。ヒュプノスへの信仰は、夢による現実の救済への期待という主題となって、《天使》と《愛撫》をはじめとする最も充実したクノッフ作品群の基層に投影されているのである。